

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K06750

研究課題名（和文）ニューヨーク近代美術館の建築展・デザイン展が日本に与えた影響に関する研究

研究課題名（英文）A study on the influence that the architectural exhibition and design exhibition of the Museum of Modern Art, New York gave to Japan

研究代表者

山崎 泰寛 (Yamasaki, Yasuhiro)

京都工芸繊維大学・未来デザイン・工学機構・教授

研究者番号：50795010

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はニューヨーク近代美術館（以下、MoMA）の建築展・デザイン展を対象に、展覧会の開催に伴う文化的力学において日本人建築家やデザイナーが受けた影響を検討するものである。1960年代以降の建築展の検討を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の影響で調査を実行できず、50年代の再読を行った。結果的に、MoMAから派遣され、モダニズムを担った日本人建築家やデザイナー、芸術家と親しく交わった石元泰博の足跡を読み直し、特に来日した日付を特定することができた。また、同じく1950年代に日本で初めての大型デザイン展の対象となったワルター・グロピウスの来日に注目し、当時の言説空間の一端を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は建築展やデザイン展という研究対象としてまだ深掘りされていない対象を扱うことで、近代建築史・建築論における研究領域の拡大に寄与するものである。特に、写真家石元泰博の足跡を確定できたことで、日米間の文化外交の最前線の一つだったアーサー・ドレクスラーと吉村順三の調査旅行に関する知見を深めることができた。建築やデザインにとどまらず、広く文化人との交流を持った石元の50年代を見直すことは、日米間の影響を検討する対象としてふさわしく、研究の継続が望まれる。また、調査結果を複数の書籍や雑誌記事の執筆に生かすことで、社会に向けた発信を行うことができた。

研究成果の概要（英文）：This study examines the influence of Japanese architects and designers on the cultural dynamics of the exhibitions at the Museum of Modern Art in New York (MoMA), with a focus on the architecture and design exhibitions at MoMA. Although we had planned to examine architecture exhibitions from the 1960s onwards, due to a new coronavirus infection we were unable to be carried out, a re-reading of the 1950s was undertaken. As a result, we were able to re-read the work of Yasuhiro Ishimoto, who was dispatched by MoMA and was in close contact with Japanese architects, designers and artists who were responsible for modernism, and in particular to identify the dates of his visits to Japan. We also focused on the visit to Japan of Walter Gropius, who was also the subject of the first major design exhibition in Japan in the 1950s, and were able to clarify some aspects of the discursive space of the time.

研究分野：近代建築史

キーワード：建築展 ニューヨーク近代美術館 文化外交

1. 研究開始当初の背景

美術館における展覧会のなかで、建築展は異色な存在である。理由の一つに、建築がその性格上、実体としての建物をそのまま美術館内に持ち込めないことを挙げられる。絵画や彫刻のような前近代から存在する作品群のみならず、写真や映画のような近代以降の芸術ジャンルと比較しても、建築は実体としての作品を展示することが難しい。また、仮に何らかの形で移築することができたとしても、その建築は地形や気候といった土地に固有の情報から引き剥がされたモノであるため、そもそも建築家が作品の実現に際して考慮した意図を見て取ることが難しい。特に近代以降の機能主義と呼ばれる建築群を展示しようとするれば、敷地の制約や立地の条件、また実現すべき用途などさまざまな環境を引き受けて設計された、建築家の創作上のねらいが見えにくくなることは否めない。

そこで建築展では、実物ではなく、実物を成立せしめてきたドローイングや模型、また竣工後の写真や批評など、ある代理表象の群れが展示作品とされ、建築のある側面を強調した展覧会が開催されてきたといえる。もちろん、図面や模型を通じて建築家の思考に迫り、その空間的な想像力の一端に触れることはあったに違いない。しかしそれにしても、実体のある建築をそのまま鑑賞できない一点において、建築は他の分野と異なると言って差し支えないだろう。建築展は展覧会のジャンルとして他の芸術分野とは異色であり、かつ、建築展という形式が作家である建築家の主張を伝える場として機能してきたといえる。さらに、建築展が記録として残されることで、後世への一定の影響力を保持し、場合によっては増幅することもあったのである。

翻って本研究開始当初の近代建築史研究の現況を概観すると、建築展をめぐる研究の状況は必ずしも活発ではなかった。建築史では建築作品や建築設計者に焦点が当てられることが一般的であり、建築展は作品や建築家の理論を補足する二次的な出来事として論じられてきた。後述するように建築展は一定の社会的事象として議論できるものだが、筆者による研究も含めていくつもの既往文献に限られていた¹。他方海外ではニューヨーク近代美術館の展覧会を中心に展示構成やキュレーションに関する研究が進められている²。

他方、日本国内では、近代建築史で積み上げられてきた建築アーカイブズ研究の厚みを基点に、2013年に国立近現代建築資料館(東京都)が開館し、また隣接するデザイン分野でも、21_21 デザインサイト(東京都)が2007年に開館し、関係者感では専門美術館の設立の議論が始まっていた。収集・保存・研究も含めつつ、展示や教育・普及活動によって社会と直接つながる回路を持つ専門的なミュージアムにおいては、当然のことながら建築展・デザイン展の開催が予期される。この折に建築展・デザイン展について歴史研究を行う機運は十分高まっていたと言える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、1929年の開館以後、世界有数の展示・研究機関として広く知られるニューヨーク近代美術館(以下、MoMA)の建築・デザイン部門が実施した展覧会の実施状況を詳らかに

¹ 山崎泰寛、松隈洋：ニューヨーク近代美術館「日本家屋展」に見るキュレーターの役割 アーサー・ドクスラーの仕事を中心に、日本建築学会計画系論文集, Vol.78, No.687, 2013.6, 1441-1446、山崎泰寛、松隈洋：ニューヨーク近代美術館「日本建築展」に見る日米の日本建築観の差異、日本建築学会計画系論文集, Vol.78, No.691, 2013, 1521-1526、入江徹：展覧会 ディコンストラクティビスト・アーキテクチャとその背景、日本建築学会計画系論文集, No.551, 329-334, 2002.1、入江徹：展覧会企画ヴァイオレイティッドパーフェクションとその背景：日本建築学会計画系論文集, No.609, 179-184, 2006.11、玉田浩之：ニューヨーク近代美術館・建築デザイン部門におけるアメリカ建築理解展覧会「Built in USA」の分析：日本建築学会大会学術講演梗概集(関東), 235-236, 2009年9月、玉田浩之：ニューヨーク近代美術館・建築デザイン部門における反地域主義の議論：日本建築学会大会学術講演梗概集(中国), 647-648, 2008年9月

² Scott, Felicity D.: Architecture or Techno-utopia, MIT Press, 2007、Staniszewski, Mary Anne. The Power of Display: A History of Exhibition Installations at the Museum of Modern Art, MIT, 1998

し、MoMA の活動が日本の建築界に与えた影響を明らかにすることにある。建築の展覧会、すなわち建築展は、建築家を軸とした作家研究の一部として言及されることが多く、体系的な研究に乏しい。しかし、建築展はキュレーターや建築家といった個人と、国家や企業といった組織の欲望が複合的に発露する点で、建築の社会的な表現行為である。たとえば国際政治学者の渡辺靖は冷戦下における文化外交の一環としてフルシチョフ対ニクソンの「キッチン論争」を取り上げるが³、建築に絞ってもそういった視点は有効であろう。また、MoMA はアメリカの文化戦略の拠点としても言及される機関であり⁴、日本のように政治的・文化的に強い結びつきを持つ国にとって、その影響は無視できない検討事項である。

筆者は 1950 年代までの MoMA の影響についてすでに研究を進めており⁵、日本の建築家やデザイナーが、MoMA の展覧会の開催プロセスのなかで MoMA に対し自らの近代性を主張し、破れていったプロセスを明らかにした。その背景には MoMA がアメリカ文化の象徴であるとし、そこで作家として認められることの意義にこだわった日本人のねじれた欲望の表出でもあった。建築の表現が決して建築業界だけで自律する作家的行為ではなく、いくつもの視点から下される評価や判断のプロセスのなかで生き延びた、社会的存在であったことを示してもいた。そこで、本研究の目的の一つに、60 年代以降を含めた戦後建築史のなかで、MoMA の影響を通史的に理解することも挙げておきたい。

3. 研究の方法

本研究はニューヨーク近代美術館の展覧会が日本に与えた影響を検討することが目的である。そこで、展覧会の企画から、運営、反響までを把握するために、関係者が残したメモや写真、議事録といった、国内外の美術館に保管されるアーカイブズを中心に一次資料とした。MoMA アーカイブズには 2018 年と 2020 年の 2 度、また高知県立美術館の資料室を利用するとともに、国内外の研究者と研究交流を図った。

一方で、当初の研究計画で記載した現地での資料収集が、新型コロナウイルス感染症の拡大のため著しく困難となり、内容を大幅に変更せざるを得なくなった。特に、国内での移動や国外への渡航が事実上不可能となった期間が発生したことで、資料収集のみならず、当初計画した幾つかのヒアリングも断念せざるを得なかった。これはパンデミックの収束が見込めないまま研究期間の終了を迎えざるを得なかったためであり、本来の計画は大幅な変更を余儀なくされ十分に達成できなかった。よって、今後の研究課題に発展させるために、文献収集や研究者間の交流にも努め、当初とは異なる形ながらも有意義な結果がもたらされるよう留意した。

特に、不十分な現地調査となったことが間違った結論を導かないように、60 年代以降の研究に先走らず、50 年代の検討もあらためて行うことにした。1950 年代の再検討にあたっては、1954～55 年の建築展「Japanese Exhibition House」と同時期に国内で実施された文化人交流である、ワルター・グロピウスの来日に注目し、当時の言説空間の一端を再考した。

4. 研究成果

4-1. 石元泰博の来日日程の確定

石元泰博（1921-2012）は日本を代表する写真家である⁶。硬質で陰影の深い写真で知られ、シ

³ 渡辺靖：アメリカンセンター，岩波書店，2008.5，41-42

⁴ Staniszewski, Mary Anne. *The Power of Display: A History of Exhibition Installations at the Museum of Modern Art*, MIT, 1998

⁵ 山崎泰寛、松隈洋（2013）

⁶ 著書の解題 10[対談]石元泰博 内藤廣・INAX REPORT, No.176, 2008.10 また、森山明子：石元泰博 写真という思考：武蔵野美術大学出版会，2010.5

カゴ、東京など都市風景の一瞬を切り取る鋭い構図が特徴的である。また、モダニズム建築の撮影でも数々の名作を残しており、丹下健三(1913-2005)や磯崎新(1931-2022)、内藤廣(1950-)など、石元の写真と建築が強く結びついた作品も多い。さらに、仏像や曼荼羅など、東洋的な精神世界を鮮やかに描いた作品でも著名である。石元は1960年にワルター・グロピウス、丹下健三とともに『桂』(造形社、1960年)を著したことで、近代建築の規則性や軽やかさにつながる桂離宮の意匠性を捉えた写真が絶賛された。

1953年に来日した石元の目的は、MoMAの写真部門の企画「ザ・ファミリー・オブ・マン」に出展する日本人写真家をリサーチすることと、同じくMoMAの建築デザイン部門キュレーターだったアーサー・ドレクスラーに同行し、桂離宮ほか日本の古建築をリサーチすることだった。これまで、石元が来日した日付は本人の記憶を根拠にして3月19日とされていた⁷。しかし、ドレクスラーの帰国日程と照らし合わせると京都での行程に無理があり、十分な調査期間が確保できていない点で不明瞭な部分があった。高知県立美術館に収蔵された石元資料の閲覧を通じて、シカゴ領事館での出国許可が2月19日、横浜港での入管記録が3月9日と明らかになった。

石元の入国日が判明したことで、日本国内での旅行の日程に既往研究よりも余裕が見込まれ、ドレクスラーと吉村順三、そして石元の3名が京都で調査した期間に整合性が生まれた。日本人建築家との会合などその間に催されたとされる出来事を裏付ける資料はまだ発見できていないが、MoMAから依頼を受けた石元の動向の一端を資料によって確定できた意義は大きい。

4-2. グロピウスの来日に伴う言説空間の構成

MoMAで開催された日本関連の展示プロジェクトを資金面で援助したジョン・D・ロックフェラー3世は、ロックフェラー財団を通じて、国際文化会館の設立にも深く関わった。特に、国際文化会館による人的文化交流として招聘したワルター・グロピウス(1883-1969)の影響力を再検討する意義は大きい。当時の日本人建築家、デザイナーのみならずシャルロット・ペリアンやバーナード・リーチら日本在住のデザイナーも関わり、グロピウスが招聘対象者として選定された経緯を踏まえても、国際文化会館を通して日米間の文化外交を推し進めようとするアメリカ側の政策意図が浮き彫りになった。

グロピウスは妻のイセとともに、ブラジル、オーストラリアと旅行して、その帰途、1954年5月19日から8月7日まで日本に立ち寄っていた。関係者の寄稿による書籍は2年後に『グロピウスと日本』(彰国社、1956年)としてまとめられたが、当時の建築・デザイン系の雑誌は、グロピウス来日関連のニュースを速報記事として数多く掲載していた。本報告では特に大きく特集が組まれた雑誌『建築と社会』1954年8月号に掲載された記事を中心に、新建築や建築文化など当時の建築メディア群が構成した言説空間を検討した。

まず、旅行記として編まれた特集の構成に注目し、建築家から学術機関の研究者まで多様な書き手によりグロピウスのイメージが構築された点を指摘できる。また、建築界のみならずデザイン界での尊敬を浴びたグロピウスのために、建築とデザインを総合的に扱った展覧会が国立近代美術館で開催されたことなど、バウハウス初代校長で、第二次世界大戦に伴う亡命後はハーバード大学で教鞭を執る教育者としての側面が強調されていたこともわかった。

また、1954年といえば、『新建築』1月号に掲載された丹下健三の論文を皮切りに、のちに「伝統論争」と呼ばれる議論が展開された年である⁸。しかも1954年とは、前年に山口文象がRIAを

⁷ 森山, 70

⁸ 吉阪隆正: ジャポニカ是非論: 朝日新聞, 1954年4月25日朝刊5面、剣持勇: ジャパニーズ・モダンかジャポニカスタイルか 輸出工芸の二つの道: 工芸ニュース: Vol.22, No.9, 1954年9月号, 2-7ページ

設立し、総評会館や国立国会図書館、さらには国際文化会館の設計において共同設計が模索された時期でもある。TAC と呼ばれる共同設計システムを実装していたグロピウスが発する伝統論は国内への影響にとどまらなかった。

一方で、グロピウスの来日に政策的な意図を嗅ぎ取ったり、過度な賞賛記事に辟易した読者の姿、また展示構成への批判が存在したことも明らかになった⁹。

4-3. 1960年代の収蔵品の増加傾向に関する検討

美術館の収蔵品は館の独自性やプライオリティを示す指標となりうるもので、美術館のブランディングに貢献する作品群である。ゆえに美術館ごとに収集方針が定められ、独自の筆者も、MoMA のデザインコレクションが整備された 1950 年代において、それらがあらかじめ歴史的価値を示すと期待されて選定されてきた過程を明らかにしてきた。また、コレクションとして選定した作品群に他者が評価した作品が紛れ込むことを極端に嫌っていた¹⁰。そこで、デザインや建築に関するコレクションの選定、収集過程に注目し、そのなかに日本の建築家やデザイナーの作品がいかに関わり込まれていったのかの検討に着手した。資料群の中に予算書があるため(ただし年度は散逸している)それを軸に進める。本項目は本補助期間の延長期間中に採択された「ニューヨーク近代美術館における建築・デザインコレクションの形成プロセスと評価」(21K04469)にて継続して調査を行うものである。

なお、本研究題目に紐づく成果として主に以下 3 冊の書籍の共著に関わり、また展覧会「建築の日本展」(森美術館、2018 年 4 月 25 日～9 月 17 日)の解説文や雑誌への寄稿など、社会に向けた研究成果の発信に努めた。学術論文については現在執筆中である。

- ・篠原聡子、黒石いずみ、大月敏雄、槻橋修編『「住む」ための事典』(彰国社、2020 年)第 5 章「情報と住む」(南後由和と共著)
- ・五十嵐太郎、李明喜編『日本の図書館建築 建築からプロジェクトへ』(勉誠出版、2021 年)
- ・山崎泰寛、本橋仁編『クリティカルワード 現代建築 社会を映し出す建築の 100 年史』(フィルムアート社、2022 年)

以上

⁹ 中村：かくされた意図を見逃すな：国際建築, 美術出版社, 1954 年 9 月号, 8 ページ、宮内嘉久：グロピウスの訪日問題はなにか? : 新建築, 新建築社, 1954 年 7 月号, 4 ページ、吉中道夫：近代主義の限界を示す グロピウスとパウハウス展：新建築, 新建築社, 1954 年 8 月号, 5 ページ、宮内は灰地啓名義のテキストでも、箱根で催された討論会では「民衆の営み」が忘れられていたと批判している。灰地啓：最後に笑うもの：グロピウスと日本文化, 彰国社, 1956 年, 349-351 ページ

¹⁰ 山崎泰寛：20 世紀のデザイン：ヨーロッパとアメリカ展の開催経緯と位置づけ 1950 年代におけるニューヨーク近代美術館及び国立近代美術館のデザイン展と「グッドデザイン」の考察から：デザイン学研究, 日本デザイン学会, 2013.8

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 山崎泰寛	4. 巻 1215
2. 論文標題 再読：日本におけるグロピウス特集	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 建築と社会	6. 最初と最後の頁 000-000
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎泰寛	4. 巻 22
2. 論文標題 スター建築家の出世作	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Casa BRUTUS	6. 最初と最後の頁 88-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎泰寛	4. 巻 811
2. 論文標題 不可能性の未来	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 建築士	6. 最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎泰寛	4. 巻 812
2. 論文標題 インフラとしての非・都市を考える	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 建築士	6. 最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎泰寛	4. 巻 813
2. 論文標題 「つながり」の先へ Countryside展	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 建築士	6. 最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎泰寛	4. 巻 68
2. 論文標題 多様な評価軸と議論の場の中で醸成されるデザイン	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 建築士	6. 最初と最後の頁 22-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山崎泰寛	4. 巻 93
2. 論文標題 建築家・安井武雄の創造力～近代建築の精華～	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 新建築	6. 最初と最後の頁 17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計4件

1. 著者名 山崎 泰寛、本橋 仁、勝原 基貴、熊谷 亮平、吉江 俊	4. 発行年 2022年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 328
3. 書名 クリティカル・ワード 現代建築	

1. 著者名 山崎泰寛・五十嵐太郎・李明喜他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 336
3. 書名 日本の図書館建築 建築からプロジェクトへ	

1. 著者名 篠原 聡子、黒石 いずみ、大月 敏雄、槻橋 修（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 彰国社	5. 総ページ数 300
3. 書名 「住む」ための事典	

1. 著者名 山崎泰寛他	4. 発行年 2018年
2. 出版社 建築資料研究社	5. 総ページ数 322
3. 書名 建築の日本展 その遺伝子のもたらすもの	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------